

成長との両立 市場に期待

富士通は今を効率化や利益重視から入や社会に価値を提供することを重視する「人の時代」への変曲点と捉え、ビジネスの目標と社会の目標の方向性を合わせて、目的堅勤の社会の実現を目指す。

富士通はバーバス「イノベーション」によって社会に信頼をもたらし、世界をより持続可能にしていくの

も、ヒューマンセントリックなサービス、データを活用した予測・予防・安心

してつながるデジタル社会の実現に向けたイノベーシ

ョンを届ける。一人ひとりの人生において選択肢をい

く多くにできるかが、社会のウェルビーイングにつ

ても非常に重要なと捉えている。

私は、社会が直面する課題を起点とした富士通の重

点注力分野であるヘルシ

リビングの責任者の一人とし

て、生活者の視点から業

種を超えて生涯のウェルビ

イーングをサポートし続け

る仕組みを取り組む。

ますバーサルヘルスの

領域では、病気ときのデ

トタだけではなく、健康など

かかるため、データを使

えるか。バーソナライズド

された診断や薬を提供して

いく。オンライン診療もそ

の一つだ。またライフサイ

エンスとコンピューターサ

イエンスの融合によるイン

シシムにあたり、病院に

あつたり、分断されている

ような、地域の取り組みに

もつながるところである。

自分のデータがスポーツ

の分野で持続的進歩を

実現するため、データを取り組んで

いる。想いを大切にしながら

社員・会社が変わり、会社が社会に変化を起す。こ

ういった取り組みを財務、

非財務の両輪で進めるこ

とを通じて、「ありたい」を社会の

「なりたい」にしていくた

い。想いを大切にしながら

社員・会社が変わり、会社が社会に変化を起す。こ

ういった取り組みを財務、

非財務の両輪で進めるこ

とを通じて、「ありたい」を社会の

挑戦 地域でも拡大



〈写真右から〉

東京都 デジタルサービス局 データ利活用担当部長

慶應義塾大学大学院
システムデザイン・マネジメント研究科 教授

データ社会推進協議会 代表理事・理事長

高橋葉夏氏
白坂成功氏
奥井規晶氏

スマートシティ・インスティテュート理事の南雲氏は、地域のデータ連携を巡つても識者3人と意見を交わした。南雲スマートシティーの最終目的是市民のウェルビーイングの向上だ。当法人ではスマートシティーでの暮らしやすさ（リバビリティ）とウェルビーイングを数値化・可視化する指標の開発・普及に取り組んでいる。データ社会推進協会と協働してウェルビーイング・リバビリティ合同員会を立ち上げ、非競争域のデータプラットフォームを構築していく。奥井データ社会推進議会（DSA）は、国

地域のデータ連携

サービス設計者育成スタート

一タ戦略を民間サイドから実装することを目指す組織だ。産官学の分野を超えたデータ連携を実現するため、プラットフォーム「DATA-EX」を提供していく。IT(情報技術)・通信・団体が参画しており、業・団体が参画しており、今後はエコシステム化していきたい。

なデータ連携を活用し、多
彩なサービスを生み出す必
要がある。この仕組みをつ
くるアーキテクト（設計
者）の育成が必要であり、我
々はスマートシティアーテ
ィキテクトの育成を始めた
ところだ。

南雲 日本のデータ連携
のイメージや、直面する課
題は。

奥井 DATA-EXの
モジュールをつくることは
技術的に難しくないが、重
要なのは産官学の様々なニ
ーズをうまくつなぎ合わせ
て使いこなすことだ。データ
の提供・活用という、需
要と供給のマッチングの課
題が今後の課題だ。

高橋 データ連携といふ
とシステム基盤をどうする
かという話になりがちだが、
それ以外にもコミュニケーション
形成、ポリシーづけなど、課題は
様々である。行政側のデータ整備
不十分なので、各自治体た
ども連携しながら進める必
要がある。

白坂 アーキテクチャー 奥井 データ利活用のマ
をつらなければ誰も使わ
ないプラットフォームにな
る。内閣府のスマートシテ
ィー・リファレンス・アーキテクチャーはそれを理解
した上で作成されており、
かつウェルビービングの指
標化に取り組んでいる点が
優れている。これにより方
向性が定まり、アーキテク
トが地域に合う形になると
ころまで来た。
高橋 東京都単独より
も、DSAやスマートシテ
ィ・インステイティートの
協力も得て、多くの方々に
参加してもらうことが重
要。広くデータが利活用さ
れるTDPFを実現するべ
く、データ連携基盤の構築
にとどまらず、コミュニケーション
形成やユースケースの
創出、様々な形の機運醸成
などの事業を同時並行で地
道に一步ずつ進めていきた
い。

南雲 様々な課題を乗り
越えるには今後、どういっ
た施策が求められるか。

白坂 複数のユースケー
スを分析していくば、どう
いうやり方でいけばいいの
かという方法論を構築でき
る。その方法論を伝達すればデジタル技術を価値に転
換し、違う分野同士を掛け合わせるDXの「X人材」の育成につながる。そこから生まれた事例をベースに
さらに方法論をアップデートすることでコミュニケーション
が成長し、次のステップへ
移行するエコシステムが

がシートはがき転記のうえをとて、次第的または音節、

二律背反ではない 「幸せ」と「経済」

今回の2日間にわたって開催された「ウェルビーイング」をテーマにしたシンポジウムで印象に残ったのは、これからは一人ひとりの「幸せ」と経済的なサステナビリティー（持続可能性）は両輪であり、不可分だという見方だった。日本はこれから労働人口が減っていくから、一人ひとりのウェルビーイングを実現し、生産性を向上させなければならない。これはウェルビーイングを実現しないと、若い優秀な人材が採用できないという、今の現役経営者の切実な危機感とも密接に関連する。

現役経営者の叨笑な危機感とも密接に関連する。

「経済的な成功を優先し、本当の幸せを軽視してきた」「だからといって経済的に困窮してしまっては、幸せにはなれない」。進化してきたウェルビーイングに関する議論からは、こうした二律背反的な色彩は薄れつつある。

ウェルビーイング経営が重視されるようになった今、注意が必要なのは、人がそれぞれ何を「幸せ」と思うかだろう。その価値観は人によって様々だし、また時代とともに変遷もする。

今、従業員とのパーカス（存在意義）共有に心を碎く経営者もまた少なくない。企業である限り、まとまり

を維持していくため、一定の求心力は不可欠だが、押し付けが過ぎると人心が離れてしまい、元も子もない。多様な人材を許容し、また仕事にやりがいを持ってもらいながら戦力として生かせるか。これからのウェルビーイング経営の成否は、ダイバーシティー（多様性）

企画・制作＝
日本経済新聞社

Asahi

Eat Well, Live Well.


企業に未来基準の元気を
 ADVANTAGE
 Risk Management Group



EY
Building a better
working world

おいしさと健康
Glico

よろこびがつなぐ世界へ
 KIRIN

第一生命
グループ

MakMax
太陽工業株式会社

dip